論　語　の　構　成

学而第一	「学んで時に之を習う」という孔子の言葉に始まる。「学」についての記述、孔子の根本思想についての立件が多いため、熟読すると良いと朱熹は言う（集注）。凡そ十六章。
為政第二	「政を為すに徳を以てすれば、譬えば北辰の其の所に居て、衆星之に共するが如し」という孔子の徳治論に始まる。政治についての記述が多いとされる。凡そ二十四章。
八佾第三	孔子が魯の家老の季孫氏の不遜な態度を批判する言葉から始まる。礼楽に関する記述が多く、この「八佾」も礼楽の行列の名前である。凡そ二十六章。
里仁第四	「仁に里（おる）るを美しと為す」という孔子の言葉に始まる。「仁徳」に関する記述が多いとされる。朱熹は凡そ二十六章。
公冶長第五	孔子の弟子の公冶長との問答より始まることから公冶長篇と名付けられる。名の通り孔子の弟子の公冶長との問答より始まることから公冶長篇と名付けられたとされる。この章の殆どが孔子と弟子との問答や人物評価（最後の三章）が書かれている。凡そ二十七章。
雍也第六	孔子が弟子の冉雍を「雍や南面せしむるべし」と絶賛した章に始まる。人物評論や「仁」と「知」の論が目立つとされる。凡そ二十八章。
述而第七	「述べて作らず」という孔子の言葉に始まる。孔子の自身言葉や容態、行動に関した記述が多いとされる。凡そ三十七章。
泰伯第八	「泰伯は其れ至徳と謂うべきのみ」という孔子の言葉に始まる。泰伯への称賛から、礼楽などの構成とされる。凡そ二十一章。
子罕第九	「子、罕（まれ）に利と命と仁とを言う」という章に始まる。孔子の言行や孔子の出処進退に関する門人の記録が多いとされる。凡そ三十章。
郷党第十	郷里における孔子の様子を記す章で構成されている特異な一篇。篇首が「孔子」で始まり、「子曰」という記述がないとされる。吉田（1960）は朱熹の集注をもとに十八章に分けた。
先進第十一	「先進の礼楽に於けるや、野人なり」という孔子の言葉に始まる。門人などの人物評論が多く、孔子が祖国の魯に帰国してから孔子晩年期がわかる。凡そ二十五章。
顔淵第十二	孔子と門人、君主が「仁」や「政」に関する問答は多く、篇首には顔回との「仁」についての問答から始まる。凡そ二十四章。
子路第十三	「子路政を問う」という政治に関する孔子と子路の問答から始まる。前半は政治について、後半は善人や士君子や道徳についての問答が多いとされる。凡そ三十章。
憲問第十四	「憲、恥を問う」という弟子の原憲が恥についての篇から始まる。ここの篇首にて孔子に「恥」について問いたが、原憲が孔子に「原思」と字を用いていることから、これ以降の篇では「原憲」のことを「原思」と字を用いているのではないか，この篇は原憲が書いたのではないかと吉田（1960）は考察した。凡そ四十六章。
衛霊公第十五	「衛の霊公、陳（陣）を孔子に問う」という章から始まる。この篇は修身出処に関する雑言が多いとされる。凡そ四十一章。
季氏第十六	魯の家老である季孫氏が魯の属国を討伐しようとしたことをめぐって、孔子と冉雍・子路が問答を交わす章から始まる。この篇は「下論」でも体裁が異なっているとし、「子曰く」となっている。凡そ十四章。
陽貨第十七	「陽貨孔子を見んと欲す」、季孫氏の家臣の楊貨が孔子を政治に誘おうとする場面から始まる。この篇は孔子の出処進退に関する章が数章ある。世の中が衰え、道が行われないことを嘆いたり、当局者や門人に与えた警告も多いとされる。凡そ二十六章。
微子第十八	「微子、之を去る」、孔子が殷に三仁ありと論評する章に始まる。この篇は他の逸民の話が多いが、孔子に関係を持つた人達の出処進退などが記されているとされる。凡そ十一章。
子張第十九	子張の「士は危うきを見ては命を致す」という言葉に始まる。この篇の大体が孔子の門人たちの言葉のみ記されている。特に高弟の言が多く、孔子に類するような言葉などが多いとされる。凡そ二十五章。
堯曰第二十	「堯曰く、咨（ああ）、爾（なんじ）舜」という堯の言葉に始まる。この篇は凡そ三章であるが、聖人の政治や為政者にとつての政治的訓誡、君子の要訣など論語全篇に照応させたように見られると吉田（1960）は言う。